

教育実践

大学における性教育

—セクソロジー入門—

村瀬 幸浩

(二橋大学)



学生のレポートから

尋常な書き方でないことは十分承知の上で、まず学生のレポートをいくつか紹介することから始めたい。

テーマは「私のセクシュアリティ形成について」である。受講者はすべて二年生である。

①女性

私のセクシュアリティ形成に大きな影響を与えたのは、母の姿である。幼い頃夫婦仲は非常に悪く、離婚寸前であった。威圧的で暴力を振るう父に対し母は激しく抵抗したが、一方でそれに耐え忍んでいた。離婚にふみ切れなかつ

たのは、子供や世間体以外に、そんな父でも母は愛情を捨て切れなかったのだろう。

耐える女の姿を見て育った私の、男性への姿勢もまた同様となった。男の自己中心性や強引さを当然のように受止め、さらにそんな男性に無意識に惹かれ始めた。付き合った男性で心から愛せたのは、独占欲の強い人であった。彼の拘束に反発しながらも、それをどこかで快く思っていた。彼と別れてしばらくは、自由の不自由さに悩んだ。しかし変化が訪れた。彼とよく似たタイプの先輩と関係してしまつたのである。拒めなかつたのは、別れた淋しさの為ではない。二人共心の底では互いに惹かれ合っていたのだと思

う。

しかし、現実には厳しかった。彼には彼女がいた。私は彼女の気持や先輩の立場、周囲の状況を考えこの問題を一人で抱え込もうとした。とても辛いが自分だけが苦しめば済むのだと思っていた。——耐える女を演じていたのである。私は、女である前に人間でありたいと思った。私の人格はどこに行つたのか、耐え忍ぶ女は哀しすぎる。自己の人格ぐらゐは主張できる女でありたい。母と同じ苦勞を避ける為にも、私は自分の経験を生かしたいと切に思う。

② 男性下

むらせ・ゆきひろ ● 一九四一年名古屋生まれ ● 和光高校教諭を経て八九年から一橋大学講師、現在津田塾大学、福島大学も兼任。八二年創立の人間と性教育研究協議会の代表幹事。季刊『ヒューマンセクシユアリティ』編集長 ● 主な著書に『授業のなかの性教育』（民衆社、七四年）『たしかな青春の日々を』（実教出版、七九年）『思春期を生きる』（民衆社、八一年）『明日への性教育』（青木書店、八五年）『性を学ぼう』（明治図書、八七年）『愛とこころの性教育』（あゆみ出版、八七年）『よりヒューマンな性を求めて』上、下（東山書房、八七年）『素敵にコミニケーション』（大月書店、八九年）『性教育のこれまでとこれから』（大修館書房、九〇年）『恋人とつくる時間（とき）』（KKロングセラー、九一年）など多数。

私にはセックスに関して、苦しい出がある。相手の女性の中絶である。高校二年の頃でした。避妊用具にコンドームを使用しました。相手の女性とは初めてではありませんでしたが、定期的に性行為をしていた訳でもありませんでしたので、両方とも避妊ということについてあまり注意をしていませんでした。

正直言つて事実を知らされた時には半信半疑で、ある意味では責任をのがれようとしていました。彼女が病院に行く時も付き添いませんでした。費用も全く負担しませんでした。薄情だと思われても仕方ありませんが、事実を認めることは非常に恐ろしかった。表面上はことが片付いて彼女と逢わなくなつてから、何とも言いようもない申し訳なさと後悔を感じました。今でもそれは感じています。あの時のセックスが、私にとって愛情ではなくむしろ快樂のためであつたことが本当に何と言つたら良いか分からないけど、つらいです。

この経験を通じて私は、セックスという行為がいかに重いものであるかを感じました。そして行為そのものに、不安と嫌悪を感じることもあります。まわりの人間の無責任な体験談をきかされるときに腹立たしさを感じるのと同時に、自分自身の無責任さを後悔します。

③男性K

私が育った生活環境というものはあまり一般向けでないようで、それがためというわけでもないが、少々特異なセクシュアリティの形成をみたのではあるまいか。

まず両親の仲が極めて悪い。物心ついた頃から四六時中いがみあっていたと記憶している。そして私が小学校六年生の時に離婚してしまい、その後は母は一回、父は三回も再婚して現在に至っている。また特に父は過保護であったため利己主義に育ち、これが原因で人間関係とりわけ女性関係には至極トラブルが生じやすく、結果的に女性との関係を保つことに疲れを感じて逃げがちになっているのが現状である。高校が男子校であったのも一因してると考えられる。

しかしながら女性に対する興味を持ち得ないというわけではなく、結果として二次元コンプレックスに陥ったというわけである。授業中に先生もおっしゃっていたが、アニメ・まんがの女性キャラクターに甘んじている。こんな私でも現実の女性とのそうした関係がなかったわけではないが、いづれも性格が災いしてあえない最期を遂げ、私はよりいっそう自分の思い通りになる二次元キャラクターに逃げてしまっている。

でも私は、このいかにも反社会的な生活関係でもよいと考える。というのは、二次元の世界において夢を見ておけば、現実において幻想を抱かないで済むと割り切ってしまうことができるからである。

④女性N

私の今日にいたるセクシュアリティの形成にとつて最も大きな影響を与えたものは、母による教育であると思う。女という性をもつ人間としての生き方や考え方について私は誰よりも大きな影響を母から受けた。

私が小学校六年の頃、早熟な子供達は『明星』という雑誌を読んでいた。そういう雑誌の後のほうには、必ず悩み相談の欄があり読者のセックスに関する相談が掲載されていた。それらの記事は、興味本位で刺激的に書かれており、当時の私にはほとんど理解できない内容であったが、ちょうど性的なものを意識しはじめる年齢でもあり、友達から借りた雑誌などで読んだりする機会が何度かあった。

そんな私を見ていた母は、ある時私を呼んで、人間の体のしくみや生物としての人間の生殖のしくみなどを教えてくれた。行為としてのセックスの話は、うすうす感じられていたにせよ非常に衝撃的であった。しかし母は性をタブー視するような態度は全くなしに、おだやかな口調で私に

語った。私は初めて知ることばかりで、ショックのあまり泣きながら眠った。

しかし、その後しばらくしてから、私は母のとつた行動に感謝した。興味本位の偏った知識をもって性を誤って認識してほしくなかったからきちんと説明したのだ、と母は言った。この事件で私は性について率直に語り、性をまっすぐに見つめるという態度を学んだ。それは今でも、女としての自分を自覚する時の根幹となっているように思う。

⑤男性N

私は中、高と男子校でした。中学時代は寮、高校時代は下宿と、親もとを離れて生活していました。この六年間の生活は、私のセクシュアリティ形成に大変大きな影響を与えました。

男子校には、やはりホモがいました。私はなぜかそういう人に好かれてしまい、ちよつと困っていました。しかし、元来からののきな性格もあつて、「別に人を好きになるのに性別は関係ないのでは」と、思うようになりました。その結果、その手の人には理解ある人だと勘違いされて、いろいろと相談を受けたりしました。また一方では、そうではない人たちと女性への関心をあたためたりもしていました。

この人格形成の大事な思春期にホモの人にあつて、私はいろいろと考えさせられました。私はホモではないけれど、ホモを否定する気はおこらなくなりました。前にも述べましたが「人が人を好きになるのに性別は関係ない」というのが、私の性に関する考え方です。

女性S

六年間、中高ともに女子高であつたため、どちらかというとなりに関する知識などにあまり接しないで十代を過ごしたが、そのかわり女の子同士、生理の悩みなどは開放的に話していた。保健の授業で中絶や妊娠の解説もあり自分とはかけ離れたことのように聞いていた記憶がある。大学にきてこの体育講義が私が最も影響を受けた性教育だったのであるが、その後、知りあいの女の子達が、早く女の子とラッキーしようぜ的なことを私の目の前で話していた時には、本当に苦々しく思った。

実際この体育講義は、私の性に対するイメージを大きく変えてしまった。高校の保健でも、安易な性意識は自分も他人も不幸にしてしまうと言われたが実感がなかった。

ビデオや映画による視覚的效果からか、私はもう性を遊び半分のものだとは決して思えない。私の高校にも、男友達と家出してしまったという人がいたが、その頃には何故

先生方がその生徒は一生を台無しにしてしまいかもしれない、とあわてふためいているのかよくわからなかった。

私の家では、家族で性の話をするのはタブーとなつていますが、これから母とも性について話しあえるようになるうと思ふ。人間として、女性として、危険でありかつ最も男女が親密になるであろう性を、まじめに正面から考えていこうと思ふ。

それにしてもこの気持と、世間などでいわれている、あの開放的なふんい気とのギャップは何なのであろうか。

⑦男性S

私は小学校の頃塾に通っており、そこで成績が良かったため、家から遠く離れた中学を受験しそこへ通うようになった。問題は、その中学が男子校だったということだ。しかもそこは、中、高校の六年間一貫教育のシステムをとつていた。さらには距離的に家から通うのが不可能で寮に入ることになったのだが、その建物は学校の敷地内にあつた。かくして私は、女つ気のない寮と学校の往復を六年間くり返すことになつたのである。

年齢的に異性への関心の高まつてきた我々の情報源は、不良図書（と呼ばれていたのでその名を使いません）であり、そこから得た少々非現実的で過激な表現や発言が、女生徒

の目をはばかる必要なく仲間内できつ交うようになる。しかし普段下品な表現を使ひやらしいことを言つていくせに、内心では異性に関して清純な幻影を抱き、普段口に出しているような性的行為はおろか、女の子とまともに会話することさえ出来ない、いわゆる純情な少年だった。

そんな六年間を経て大学生となり、実際に同世代の女の子と接触するようになるが、自分の描いていたイメージとあまりに違いのある現実の女の子の考え方は私にはただただ驚きであつた。男女交際に対する考え方やセックスの見方など、それまで抱いていた理想はあらかた消え去つたが、心のどこかではいまだにわりきれない部分がある。

ロリータコンプレックスや悪い意味での女たらしなどは、自分の抱いていたイメージと現実の差に耐えられなかつた人々だと理解できなくもない。しかし社会適応という点で明らかに問題があり、それがすなわち男子校の問題点だと思ふ。

⑧女性K

私がかナダの国際学校に通つていた時に受けたエイズ教育は、今でも強く印象に残つてゐる。その日は一日中、産婦人科医やカウンセラー、実際のエイズ患者等からエイズや性一般に関する講義や討論にさかれた。私は、主に二つ

の事に驚かされた。それはどちらも日本で受けた性教育とは、全く異なるものであった。

その一つは、性に関する話のすべての内容が、若い男女でも性行為をもつであろうということを前提に成立していたことである。そのため中絶や避妊の手段に関することが、とても実用性を帯びた知識として私達に与えられた。レクチャラーの一人が、コンドームを生徒全員に配り使い方を指導したことが良い例だ。もう一つは、講義もその後の討論もすべて男女区別することなく一緒に行われたことだ。

日本では常に男女別で行われ、一種のタブーとされてきたためシヨッキングな体験でもあった。講義の中では、男女両方が性に関して偏ることなく同等の知識をもつことの重要さが強調された。男女一緒に性の互いの立場をオープンに話合うことで、今まで性に関してもっていたいやらしさやタブーといった意識がいつの間にか改善された。

今では、むしろ男の人ともオープンに話合えることは非常に重要だと思っている。それが性に関して正しい理解を促す最良の道だからだ。これらのことを教えてくれたあのカナダでの一日は、私のセクシュアリティ形成に大きな影響を与えてくれたのだ。

□

□

上記のレポートは、講義を終了したあとの提出物の一部として課したものである。百九十名の受講者の内のわずか八名ものを紹介したにすぎないが、それぞれ実に多様な歴史を背負って生きてきたことがわかる。そして大学の性教育も単に「知」を育てるだけでなく、彼等のセクシュアリティ形成に響いていくものでありたいと願っている。

受講内容の骨格

① 人生八十〜八十五歳時代の生と性

ここでは、導入をかねてライフサイクルの変化に着目させた。そして「延命と少産」「両性の平等性の追求」「性的自己決定」をキーワードにして、結婚、家族、性モラル、両性関係のあり方が底揺れする背景を考えさせた。

② 性と人権

まず人工中絶をめぐる各国の状況を、「ABORTION」北と南の女たち」というビデオを視聴することで理解させようとした。その後、アメリカにおける中絶論争と法的措置の変化をとりあげながら考えを深めた。さらにわが国における優生保護法の成立の背景をたどりながら、この法

律の特徴と今日の問題状況について解説した。

③性と生殖

ここでは出産・出生のメカニズムをみつめなおすということ、特に「胎児は母体にとって異物」であることを軸に生命への認識を深めることに主眼をおいた。また「ほぼ一カ年は母体外胎児」といわれるように、養育の不可避性と人間的形質の「獲得」について理解させるようにした。こうした学習によって、母子一体論の克服と「他者」としての子どもの養育の意味について、考えさせたかったのである。

さらに、どのカップルも必ず身ごもるとは限らない。産みたくとも「産めない」（不妊）こともある。したがって「産む」「産まぬ」「産めぬ」こともふくめた人生の選択。不妊につながる不妊治療や生殖技術の現状と問題点についても、学習課題にとりあげた。学生の反応は大きいものがあった。

④人間の性の最低条件としての避妊

年間五十万件にも及ぶ人工中絶、その九〇%以上が既婚者によって占められている事実をもとに、避妊のむずかしさと絶対必要性に気づかせる。特に、避妊のメカニズムの正確な理解もさることながら、「二人の関係の質」こそが

決め手であること、二人でとりくめるかどうか、決定的な鍵であることを強調したい。

⑤性差を考える

性差についてその発生をたどりながら「男と女」のなかに異なるのか、異ならないのか考察していく。特にこの学習を通じて性器の性分化、さらに脳の性分化など「人間の両性性」に着目させる。そこから固定的な性差観や「特性」の名による区別が差別に限りなく近づくことを考えさせたい。そして一人ひとりの性度、個性に注目するような人間観を育てたい。

⑥人間の性の多様性—育てられるものとして

人間の性には、生殖と性愛の両面がある。生殖の性は、ヘテロセクシユアルというスタイルをとり公認されたものであるが、もう一つの「性愛」には実に多様な表現を伴う。同性愛、ナルシズム、ペドフィリア、フェティシズム etc. こうしたバリエーションを、「育ち」への考察もふくめて考えさせたい。

前半部の受講者のレポート課題は、この「育てられるセクシユアリティ」の講義からひき出されたものである。

⑦セクシユアルハラスメント、レイプとは

『声なき叫び』という映画を視聴し、そこから学習課題

をひき出した。このテーマは受講者の反応が最も大きかったものの一つである。特にレイブをめぐる神話は、彼らの偏見そのものであったことも驚きであったようである。

⑧ HIV 感染・エイズ

一九八五年制作のアメリカのテレビ映画『早霜』を視聴させた。この中では、HIV 感染に出会ったゲイカップルとその親子の葛藤が描かれている。単なる医学、疫学的フィルムとはちがって、そこに登場する「人間」を通してこの感染症に対するより現実的な理解を深めさせようとした。このフィルム視聴のあと、エイズと人間とのかかわり、予防への確信と感染者との共生への展望について講義した。

⑨ 共生について考えるー結婚は、家族は、どうなっているかー

ひとはなぜ「つがい」を形成してきたかをたどりながら、結婚の「核」と制度としてのその矛盾を考えさせたい。さらに『スウェーデンの結婚と家族』を視聴し、その行く末の一つの形について認識させたかった。

⑩ 女性差別撤廃条約とこれからの男女関係

これこそ彼等が、これから直面するテーマである。事態を客観的に見つめ、より主体的に対応するためにもしめくくりとしてこの課題を提起した。

以上が講義のあらすじである。願わくばもつと少人数でディスカッションをさせたり、課題を与えたりしながら深めたいのであるが、いかんせんマイク授業になってしまっている。

そうした条件のもとではあるが、講義をきく学生たちの様子や毎時間提出させるミニレポート、あるいは学期末の提出レポート、さらに高出席状況など考えてみても、確かな手応えを感じとることができる。

大学生になっていまさら性の学習など、という大方の批評を耳にすることがある。しかし実際の学生の反応からして、決して遅すぎることはないと考えている。いや遅すぎるといふ言い方自体、性を学ぶことの本質をとらえていない。性は、生涯学び続ける価値のあるテーマである。性体験が急激に増加する大学生、青年期においてこそ、自らの日常の生活課題であり、将来展望につながるセクシュアリティの形成にとって重要な学習機会であると確信している。